

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 2 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520989

研究課題名(和文) 地域再構築における中高年女性の伝統手芸活動と民俗技術の多様化

研究課題名(英文) Diversity of women's practices of traditional handicraft technology and reconstructing of regional community

研究代表者

坂元 一光(sakamoto, ikko)

九州大学・人間・環境学研究科(研究院)・教授

研究者番号：20150386

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円、(間接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：福岡県柳川地域のひな祭り行事の際、雛人形の両側にさげられる吊るし飾り「さげもん」(毬とちりめん細工)は、自作の贈答品としてだけでなく趣味の手芸品、土産品として一年を通して制作されている。近年、さげもんが観光資源に活用され、またその需要と供給の地域的流通システムが形成されることで、中高年女性を中心に様々な目的や技術をともなう制作活動がさらに活発化し、民俗技術の持続にもつながっていた。柳川のさげもんの民俗技術はその観光資源化と多様な制作グループの自主的活動を通じて、地域社会の活性と伝統の再創造および中高年期の女性の生活の質の向上に積極的な役割を果たしていることが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：The customs of first annual festival for girls in Fukuoka Prefecture Yanagawa region are characterized by the Sagemon, which is hanging ornaments comprising splendidly embroidered mari and small handmade stuffed figures made from silk crepe. These handicrafts are produced year round, as personally made gifts and as hobby handicrafts and souvenirs. In recent years, Sagemon have been exploited as a tourism resource, which, through the formation of a regional distribution system of supply and demand, has also stimulated production activities associated with various techniques and purposes, primarily among middle-aged females. Through their commodification as a tourism resource and voluntary activities of a variety of production groups, it has become clear that Yanagawa Sagemon folk craft is playing an active role in the stimulation of a regional community and re-creation of tradition, as well as improving the quality of life for middle-aged females.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学・文化人類学・民族学

キーワード：民俗技術 吊るし飾り 中高年女性 観光

## 1. 研究開始当初の背景

福岡県柳川市の伝統習俗である「ひな祭り」では、通常のひな人形に加え、地域の伝統工芸(手芸)の柳川毬と袋小物(ちりめん細工)からなる吊るし飾り(「さげもん」)が付随し、当該行事に独自の地域特性を添えている。本来さげもんはひな祭りの期間中、初節句の女兒の家庭で雛人形とともに飾られる手作りの吊るし飾りであるが、現在は行事期間中だけでなく柳川を代表する伝統手工芸品として一年をとおして観光客の目を楽しませており、そうした需要や市場に応えるための制作活動も盛んである。柳川のさげもんは自作の贈答品としてだけでなく観光客向けの商品としても需要があるため、地元の婦人会や文化サークル、あるいは手芸店の教室等において季節を問わず盛んに作られている。特にここ10年ほどは行政の地域振興策の一環として、ひな祭り行事の観光化が積極的にすすめられ、さげもんへの注目が集まるなかで、地元女性のさげもん作りは地域に伝えられてきた貴重な伝統工芸あるいは民俗技術として再認識されつつある。筆者は地域の民俗技術としての手芸技実践が現在も人々の生活に深く根付いて生き続けている様子に興味と関心をおぼえ、さげもんの手芸技術が柳川の地域振興において実際にどのような役割を果たしているのか、また地元の女性たちの生活や人生の中にどう位置づいているのか、大きく2つの問いを立てた。またこれらの問いに実証的、構造的に答えることは、今後の地域社会と民俗・伝統との共存共栄の道筋を探ることにもつながると考えた。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は柳川の伝統手工芸さげもんの制作活動の実態解明を通して、地域振興及び女性の生(生活と人生)の再構築と多様な手芸技術の実践との関係を実証的に明ら

かにすることである。近年、行政による地元ひな祭り習俗の観光事業化やさげもんの土産物(商品)化によりさげもんへの関心と需要が高まりつつある。また生活や時間に余裕がもてるようになった中高年女性を中心に、趣味や実益を兼ねたさげもん作りが盛んにおこなわれている。このことを受け本研究では以下の5点を目的として設定した。

(1) さげもん作りの活性においてその重要なコンテクストを構成している観光化(再構築)されたひな祭り習俗の実態と過程を明らかにし、さげもん作りを支える文化(民俗)的基盤とそこでのさげもんの位置づけを明らかにする。

(2) さげもん作りを支える手芸技術が当該地域に普及し、受け継がれてきた過程と現在の習俗の形態の関係について歴史的な視点から明らかにする。

(3) 女性たちのさげもん作りの活動を、様々な目的、場所、対象と結びついて展開する技術の多様な社会的実践と捉え、その組織化の過程と作り手たちの生活や人生過程における影響について把握する。

(4) 柳川以外の類似の吊るし飾り習俗をめぐる技術的実践を比較参照し、柳川の地域性、独自性を抽出するとともに他地域の特徴的な技術的実践について明らかにする。

(5) 柳川をはじめ全国の吊るし飾りの技術と習俗を、地域の活性や人々の生活の充実、向上をうながす文化資源として継承していく上での条件や課題について検討する。

## 3. 研究の方法

(1) 当該研究は平成23年度からの3年計画で柳川地域の吊るし飾り習俗およびその観光化事業に関する現地調査を中心に進められた。

(2) 各家庭や街中に吊るし飾りが展示されるひな祭りの時期(2月~3月のほゞ2か月間)には、主として観光資源化の実態と個別

家庭のひな祭り行事の現状を調査した。

(3) ひな祭りの行事期間以外は、主としてさげもん制作現場での参与観察や関係者への聞き取り調査を実施した。

(4) 柳川での調査と並行してその地域性、独自性を浮かび上がらせる目的で類似の吊るし飾り習俗及びその観光資源化の実態が見られる静岡県伊豆稲取、山形県酒田市の現状を比較するとともに、各地域独自の技術的実践の展開についても調査をおこなった。

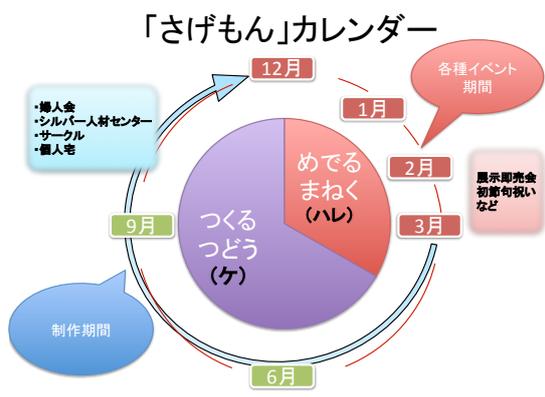
#### 4. 研究成果

本研究では福岡県柳川に伝わる女兒初節句の吊るし飾り（「さげもん」）制作を地域の民俗に埋め込まれた技術的実践という視点から取り上げることで、それがひな祭り習俗の観光資源化やさげもん作りの趣味活動化など現代的文脈の中で目的、対象、場ごとに多様な活動として組織化されている現状を明らかにし、結果としてそれらが地域の伝統文化の創造的な継承および中高年期の女性の生活の質向上に積極的な役割を果たしている実態を明らかにすることができた。以下、先述した研究目的に沿ってその成果を記す。

(1) さげもん作りの活性の全体的コンテクストを構成しているひな祭り習俗の観光化の実態とその実施過程に関して、柳川の観光ひな祭りイベント「さげもんめぐり」期間中に開催された8つのサブイベントの実態調査をおこない、他地域での観光ひな祭りイベントとも比較検討した。その結果、柳川の観光ひな祭りを構成するサブイベントのほとんどは、相互に関連づけられた一連の行事として新しく創出され、それぞれに「伝統的」雰囲気や伝わるような工夫や演出がほどこされていた。こうしたサブイベントの創出や演出は2ヶ月余り続く観光ひな祭りの期間中、その祝祭的時間を断続的に確保し、より多くの観光客を呼び込む戦略的な役割を果たしていることが確かめられた。このように構成、配置されたイベントの形態とそこに展示さ

れたさげもんは、複数の固定施設でのつるし飾り展示を中心イベントとする他の2つの地域の観光ひな祭りには見られない柳川独自の伝統再創造の取り組みとなっていた。

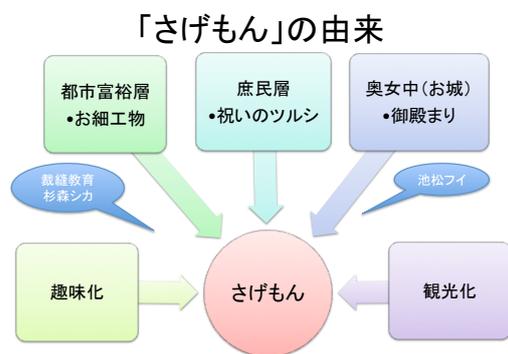
また今回の研究ではこうしたさげもんを観光ひな祭りの際に街を挙げて飾り立てる期間とそれ以外の準備期間、すなわちさげもん制作する期間を1年のサイクルの中に配置することによって、さげもん習俗全体をハレとケという2種類の民俗的時間の構成あるいは循環として捉える「さげもんカレンダー」を案出した。これによってさげもんを「愛でる」期間、「作る」期間という伝統技術をめぐる対照的な社会的実践の時間枠組みを確認した。ちなみに地域で作られた鞠や細工物が一堂に会して展示販売される「さげもん即売会」は、「作る」期間から「愛でる」期間への一大転換点として、また地域で作られたさげもんの全体的流通が集約的に顕在化する機会として重要な位置づけを持つことが明らかになった。(図1)



(図1)

(2) 柳川の手芸技術の伝統と普及、そして現在のつるし飾りの内容と構成が成立する過程には当地の杉森シカ創設による杉森女芸学校以来の裁縫教育の歴史が大きく貢献していると考えられる。杉森シカは明治期、東京の共立女子職業学校に学び、そこで使用していたお細工物の教科書を柳川に持ち帰

り、地域の女子学生たちの裁縫教材に用いたと言われている。筆者はこうした歴史的経緯に加え、一般家庭の初節句のさげもん飾りに貝殻やい草、毛糸を使った素朴なつるし飾りを見出すなかで、現在の華やかな細工物をさげるさげもんは明治期末からの女子裁縫教育を契機にそれまでの素朴な貝飾り等に代わって華麗な細工物が吊るされるようになったと考えた。さらにはほぼ同時期、これに地域の御殿鞠の技術伝承が結び合わされることによって、現在の柳川毬と袋小物（ちりめん細工）からなるさげもん飾りが形成されたとの仮説をたてるに至った。（図2）



(図2)

(3) 民俗手芸技術の社会的実践の多様な展開とその作り手たちの生活や人生過程における影響については以下のように把握された。まず、女性たちのさげもん作りの活動に関しては婦人会とシルバー人材センター、商店街の手芸店の手芸教室、個人宅での私的製作活動などを中心にその実態を把握することができた。結果として女性たちが趣味や実益、健康維持、生涯学習など様々な目的をもって、あるいは重複する目的の中でさげもん作りの技術的実践に参加していることが明らかになった。またその活動は制作対象によって住み分けられており、鞠作りを専門とするグループや細工物作りを専門とするグループ、両方

を制作するグループなどその目的や嗜好によって多様な技術的実践が見いだされた。さらに制作対象を同じくするグループ間でも「伝統的（と信じられている）」形式を重視して作るグループから新しいアレンジを積極的に取り入れる革新派のグループまでさまざまであり、指導者の目的や趣向を反映した技術的実践の多様性が見られた。

柳川で見られるさげもん作りの多様な技術的実践に対し、そこに参加する女性たちには制作に向かう共通した能動性とインセンティブ（快美感覚や達成感、自己成長感、社交の楽しさ等に由来する様々な喜び）を認めることができた。アンケート調査や聞き取り調査にもとづき、さげもん作りの実践共同体への積極的参加や制作に向かう能動性を生み出す要因として、手指使いの身体的喜び、技術向上の喜び、作品創造の喜び、自分の作品を見せる喜び、美しい作品を皆で愛でる喜び、作品販売で収益を得る喜び、皆で集まり社交を楽しむ喜び、などの多様なインセンティブを抽出することができた。柳川のさげもん作りは人生の後期段階の中高年女性に対して技術的実践を通じた快美感覚や身体性をともなう多様な喜びをもたらすとともに、地域の伝統技術を引き継ぐ実践共同体の成員として技術的自己成長と地域的アイデンティティ形成の可能性を見出すことができた。

(4) 柳川以外の地域の類似の吊るし飾り作りをめぐる技術的実践との比較を通しては以下のことを明らかにした。他の地域との比較において改めて浮かび上がった柳川のつるし飾り作りの最も注目すべき特徴としては、さげもんの制作と消費がほぼ地域内部で完結するローカルな需要・供給システムを備えているという点である。観光土産や既成贈

答品、自作贈答品を含め、地域で消費されるさげもんは基本的に地域の一般女性の手で作られ、婦人会やシルバー人材センターなどの組織や店舗を介して地域内に供給される。12月に開催されるさげもん即売会はこのローカルな流通システムが集約的に顕在化する機会（場）である。このシステムにもとづくさげもんの循環は地域独自の小生産物の経済・流通システムを生み出す場というだけでなく、またたとえそれが観光資源化や趣味・学習資源化などさげもん習俗の再文脈化の変容の中にあっても、地域の人々がさげもんの需要・供給システムに直接、間接に参画するという意味において、その技術は地域の生きた伝統として人々の生の過程に深く組み込まれ、彼女（彼）らの地域的アイデンティティの構築を促していると考えられる。

また、つるし飾り作りをめぐる技術的实践と地域アイデンティティの構築との相互的關係に関しては、酒田の傘福伝統の再創造の事例からも興味深い知見が得られた。酒田市商工会議所の記念事業として伝統傘福の再創造に取り組んでいた女性たちが次第に傘福の習俗調査や古傘福の修復・復元などの自主的な伝統の探求活動を展開していく過程を追うことを通して地域振興事業が市民主体の地元学/地域学の実践や学びへと接続しうる可能性を見出した。これは伝統のつるし飾り作りをめぐる技術的实践が当事者たちの地域的アイデンティティの構築に結びついていくという柳川と共通の枠組みでとらえることができる。

(5) 柳川をふくむ三地域の観光文脈における吊るし飾り習俗の今後の継承、展開に関しては、地域ごとに様々な条件や背景があり共に流動的である。柳川では地域におけるもさげもん供給の一翼を担う老人層の離脱が始まっており、伊豆稲取では少子化が初節句習俗そのものの存続に影を落としている。酒田

の場合も活動の中心メンバーの女性数は伸び悩んでいる。少なくとも全体に共通する喫緊の課題はなにより地域における活動参加者の裾野を若い世代のリクルートを含め広げていく努力と工夫であると思われる。

(6) 最後に本研究の成果の国内外における位置づけ、インパクト、今後の展望等について記す。今回の研究では柳川を中心に全国三地域での吊るし飾り作りを伴う習俗行事を取り上げ、そこでの技術的实践の新しい文脈や組織化を地域社会及びそこに参加する女性たちの生（生活・人生）の過程の再構築に関連付けて実証的に比較検討をおこなった。柳川の場合、地元の伝統習俗と深く結びついた女性の手工芸技術が地域社会や女性たちの生の再構築そして結果的にその伝統維持にも積極的役割を果たしている実態を民俗技術をめぐる多様な社会的実践と観光や趣味活動等の文脈との関係において明らかにした。日本の吊るし飾り習俗に関するこうしたアプローチは、従来までの民俗誌的関連研究には見出すことができず、その視点や方法、比較の体系性、現状把握においてこれまでに無い全く新しい成果が得られたと考える。またそれまで地元で漠然と断片的にしか語られていなかった女性にとっての伝統のモノづくりの意義を科学的方法と概念の上のせて検討したことで、実証的な実態把握が進んだのみならず、一連の調査過程を通して行政や市民・町民まで広い範囲の人びとに対し、その習俗や技術の価値についての再認識を促すことにつながった。その社会的意義とインパクトは柳川や酒田などで開催されたシンポジウムの2件の招待（記念）講演依頼の実績が具体的に物語っていると考える。

また単に民俗行事の担当者、継承者というだけでなく在来技術の実践者、継承者としての女性の役割の重要性に着目する本研究の

視点は、内外の様々な変化要因にさらされその再構築をせまられる日本の地域社会の展望を探る上で1つの手がかりを提供することが期待される。同様の視点はグローバル化の波に翻弄される世界の周辺地域を対象にした検討にも適応可能であり、国際的な研究展開への道も開くであろう。最後に柳川の調査研究においては技術習得、継承のミクロな過程、贈答をめぐる社会関係、モノとしてのさげもんの移動、配置など探求すべき課題も多く残されており、今後も同地の調査研究を継続的に進める予定である。

## 5. 主な発表論文等

### (1) 雑誌論文 (計4件)

- ① 坂元一光「伝統の創造と地域学ー平成傘福物語ー」『国際教育文化研究』、査読無し、Vol.13、2013、119-212。
- ② 坂元一光「伝統を創造する女性たちー酒田の傘福復興事業と地域学/地元学ー」『国際教育文化研究』、査読無し、Vol.12、2012、1-15。
- ③ 坂元一光、末廣真木、宮本聡、翁文静、吉丸梓、泉純子、藤原旅人、平成24年3月「吊るし飾りを伴う観光ひな祭りの比較ー柳川、稲取、酒田における女兒初節句習俗の再構築ー」、査読無し、『国際教育文化研究』、Vol.12、2012、39-49。
- ④ 坂元一光「地域女性の学習資源としての手芸伝統ー柳川のローカルな知をめぐるー」『九州大学大学院教育学研究紀要』、査読無し、2012、第14号、59-73。

### (2) 学会発表 (計5件)

- ① 坂元一光、「さげもんに託す地域の明日ー伝統をつくり、めぐる、つなぐー」柳川ひな祭り実行委員会・柳川市共催、柳川雛祭り・さげもんめぐり20周年「おもてなしシンポジウム」記念講演、2014年1月19日、柳川市総合保健福祉センター。

- ② 坂元一光、「「伝統」のつくり方、つなぎ方ー日本三大吊るし飾りを訪ねてー」、第4回九州大学人間環境学研究院マンスリー学際サロン、2013年10月23日、九州大学。
- ③ 坂元一光、「伝統の創造と地域学ー平成傘福物語ー」、「庄内傘福研究会」主催・酒田市共催、市民シンポジウム「伝えよう未来へーみんなの傘福ー」、記念講演、2013年2月2日、酒田市市民会館。
- ④ 坂元一光、「地域文化の活用から探求へー酒田商工会議所女性会の傘福事業ー」、日本民俗学会64回年会、2012年10月7日、東京学芸大学。
- ⑤ 坂元一光、「中高年女性の生涯学習活動と伝統工芸継承」、日本民俗学会第63回年会、2011年10月2日、滋賀県立大学。

### (3) 図書 (計1件)

- ① 坂元一光、『さげもんに託す地域の明日ー伝統をつくり、めぐる、つなぐー』、九州大学教育人類学研究室、2014年3月20日、総頁数16ページ。

### (4) 産業財産権

なし

### (5) その他

なし

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

坂元 一光 (SAKAMOTO IKKO)

九州大学・大学院人間環境学研究院・教授

研究者番号：20150386